

『見聞集』における『涅槃經』の一考察

吉田 宗 男

『見聞集』の『涅槃經』の抄出文を見ていく上で、一際、注意をはらわねばならないこととして、『見聞集』に見られる他の抄出文の扱いが挙げられるであろう。『見聞集』の構成は、先ず、親鸞の自筆により『見聞集』という表題が施され、最初の抄出文として『淨土五会念仏略法事儀讚』（以下、『五会讚』とする。）がきて、それに続いて『涅槃經』の抄出文がくる。現在は二分冊されているが、親鸞の頃には一冊本としてあった。形態的に見ると、この『見聞集』は「ひらがな本唯信抄」「聖覚法印表白文」「御念仏之間用意聖覚返事」「或人夢」（或人夢）に関しては、『見聞集』と同面にある。）の裏面を利用して書写されている。これらを反故とする見方もあるが、同時に両面を見られるような工夫がなされているところから、「ひらがな本唯信抄」をはじめとして聖覚に関する文等を反故としてではなく、『見聞集』成立の延長上にあると見ることでできるのではなからうか。特に、『唯信抄』との関係を考慮に入れることにより、親鸞の『見聞集』における『涅槃經』の抄出の意図を探る手掛かりとしていきたい。

『見聞集』に見られる『涅槃經』の抄出文は、都合十四五文となっている。これらの抄出文は南本に依っており、『聖行品』『梵行品』『迦葉菩薩品』『四相品』『四依品』の順で引かれている。特に、『聖行品』『梵行品』で十文を占めていることからわかるように、ここから聖行・梵行という仏道における行の本来性に目を向

けている親鸞の意図が窺えよう。そして、これら二品の抄出文において親鸞独自の抄出がなされていて、この二品を中心として『見聞集』での『涅槃經』の特色が顕われている。

『聖行品』を要約すると、仏が持戒堅固なるべきことを勧め、四諦慧・二諦慧・一諦慧を次第に説いていき、圓の慧行に及ぶ。続いて歎經の文に入って、五味の譬えを出し、「諸行無常 是生滅法 生滅滅為 寂滅為樂」の偈文によって捨身の本生譚が述べられる。ここで抄出されている四文は、第一文「愛の二義」、第二文「実諦は一道清淨」、第三文「真実の転釈」、第四文「諸行無常の知見」となっている。第四文については、さらに、「外道理非の文」「悪の類別と三昧による断」「五味相生」の項目に分けられる。この「聖行品」からの抄出は、『涅槃經要文』と「教行証文類」にも見られるわけであるが、特に、『涅槃經要文』との抄出が大きく異なっている。『涅槃經要文』の抄出は、第一文「相應心の異相」、第二文「仏語の不同」の二文であり、この第二文では、『見聞集』での抄出『涅槃經』の「悪の類別と三昧による断」が重複しているが、同じ箇所でも読み変えによりその意味合いが大きく違っていることが分かる。悪の類別について原文と『涅槃經要文』では、「悪有二種、一者阿修羅、二者人中」となっているが、『見聞集』では、「阿修羅」が「阿羅漢」となっている。諸説の中で、親鸞の誤写とする説もあるが、『涅槃經要文』で同じ箇所を書写しているわけであるから、誤写であるならば、当然、訂正があるのではなからうか。ここを「阿修羅」と読むか、それとも「阿羅漢」と読むのとは大きな違いがある。悪を「阿修羅」と「人中」とおさえたならば、六道の中でのおさえに止まるが、これを「阿羅漢」とした時には、凡愚が帰依していくべ

き教えは、声聞教なのか菩薩教なのかという確かめが根底にあるように思われる。このことは、この文の前の「外道理非の文」の読み変えによっても頷ける。原文で、「この故に外道の言説すべきところは、悉く妄語にして真諦あることなし」と読むべきところを、「この故に外所ならくのみ、言説悉くこれ妄語なり。真諦あることなきは、諸の凡夫人なり」と読み変えている。読み変えによって、外道の言説に真諦がないということから、真諦のないものが諸の凡夫人であるとおさえられている。それに続く文として、一切の有為が無常であることに對して、無為であるところの如來・仏性・法・僧こそが常であるという箇所をもってくるところから、真諦なき諸の凡夫が帰依すべきところが明確に示されるということになる。そこから、徹底した凡夫の自覚が強調されるような抄出となまっていることが分かるであろう。

「梵行品」は、大般涅槃の境地に致るに必要とされる至淨の行法として、七善と四無量心と持戒を挙げ、歎經に入ってから阿闍世王帰仏の因縁が起こされてくる。この「梵行品」では、六文が抄出されているが、その中心は阿闍世王の因縁である。特に、この部分は、「信卷」の難治の機の部分に当たり、その重要性が窺える。第一文は諸法の義を明し、「慈即如來」、第二文は知因果で、「從闍入闍の四句」、第三文は二乗の涅槃に對する菩薩の涅槃の常住不可称量にして実用あることを述べ、「道の無常」をそれぞれ抄出する。第四文は、如來の施樂による衆生發心を述べ、大慈・大悲・大喜・大捨を歎ずる偈文を引き、眞の善知識をおさえる。それに続けて十種不淨肉食の文を挙げる。この文は、高田專修寺藏の「淨肉文」にも見られるが、これら戒律について述べている文は、これを守ることに主眼が置かれていたのではなく、

守ることのできない凡夫の凡愚性を強調しているのである。そういった凡夫にとって、仏菩薩は慈として現れたり、実用として現れたりするのである。その具体相が阿闍世王の因縁なのである。残りの四文は、「迦葉菩薩品」の「煩惱の因果は衆生」の文、「四相品」の「一切断肉」と「眞解脱即如來」の二文、「四依品」の「供養闍法の利益・四依法・光明不羸劣」の文となっている。「迦葉菩薩品」では、眞の教えとしての菩薩の無上道があるにもかかわらず、容易にその道を歩んでいくことのできない衆生を見据え、「四相品」「四依品」によって凡愚の衆生の本質をおさえた文が抄出されている。

以上の抄出文からこれらは仏菩薩の下化衆生という慈悲摂受の面が浮かび上がっているように思われる。この抄出は、前にも述べた通り、聖覺の「唯信抄」と密接な繋がりがあある。「唯信抄」の後半に述べられている弥陀の願力と先世の罪業あるいは、五逆と宿善といったことは「聖行品」「梵行品」での課題であり、そういったことを我々の前に下化衆生といった形で具体相として顕わしているのである。また、親鸞は、関東の同朋・同行の教化のために、度々、「唯信抄」を書写し、それを与えている。それは凡愚の衆生が仏道を歩んでいく機縁は、仏菩薩の下化衆生という慈悲摂受にあるということをいわんがためである。そういった「唯信抄」の精神を「五会讚」と「涅槃經」によっておさえるおしていったものが「見聞集」なのではなからうか。そのことは、「見聞集」という親鸞の記した表題からも窺える。「五会讚」「涅槃經」といった経論を見聞していくことは勿論であるが、親鸞にとっては法兄であり、源空の教えの正統な理解者である聖覺の領解を聞きとっていくという想いが込められているように思う。